
異世界冒険鬼(仮題)

八咫烏村長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界冒険鬼（仮題）

【Nコード】

N9466X

【作者名】

八咫鳥村長

【あらすじ】

時は近代、平成の世

高校進学を機に幼少期を過ごした町へ戻ってきた主人公は、幼馴染と再会を果たす

道に迷った主人公を幼馴染が助けたり、不良に絡まれた主人公を幼馴染がぶっ飛ばしたり

ちよっとポジション変わってくれ！とか思う間もなく妖の出現と呼应するように『鬼ノ血』に目覚めた主人公

高校生活をおくりながら、妖怪を狩る日々だったのだが…。

第一話 これでも世界は平和だった（前書き）

キーワードと警告はあくまで予定です！

特に恋愛！と・く・に・恋愛！

書けなかったらごめんなさい…

第一話 これでも世界は平和だった

夜の住宅街を駆け抜ける者たちがいる

前方に行くのは火のついた輪、後方に行くは高校生ぐらいの男

はたから見れば一体何をしているのかと首を傾げる人がいただろう
もしかしたら男が火のついたタイヤを転がして遊んでいるように見えるかもしれないが

当の男が聞いたら心外だと言うだろう

（くそっ、車輪だけあってはえーな！）

何とか離されないように全力で追いかける

住宅街の角を曲がり続けて既に1km以上走っているだろう

男は、片手に持った黒い箱に声を掛ける

「っし！目標、予定のポイントに向けて移動中、あと5秒ほどで着く」

「――ザッ、了解」

黒い箱からは女性の声が聞こえた。

火のついた車輪が十字路に差し掛かった瞬間、角から人影が飛び出し手に持った木刀を叩きつけた！

ガッ――――

その衝突で両者、程度の差はあれ体勢を崩したところに男が追いつく

『目覚めろ、鬼ノ血！』

瞬く間に男の体が膨れ上がり、頭から2本の角が生える
鬼と化した男は走ってきた勢いのまま豪腕を振り下ろした。

「ふー、あー疲れた」

鬼の姿から人の姿へと戻った俺は住宅街の壁に背中をつけ呼吸を整える

俺の名前は武宮亮平、たけみや りょうへい中肉中背で若干目つきは悪いが、はっきり言
ってどこにで

もいるような高校生男子だったはずだ、約1週間前までは…

「追い込み役ご苦労様」

木刀を持った女は、ねぎらいの言葉と共にスポーツドリンクを差し
出してくれた

「おっ、サンキュー助かるわ」

目の前の女は山城綾乃、やましろ あやの一ヶ月ほど前に再開した幼馴染だ

まあ、幼馴染といっても十年近く会っていなかったが、この一ヶ月
で大分打ち解けることができた

黒髪、黒目、髪はロングで前に流した毛先がほんの少し内側にカー
ブを描く

実家が古武術の道場ゆえか、背筋はぴんつとのび凜とした雰囲気を持
ちスタイルもよく、胸もそこそこ

再会したときは余りの美少女っぷりに開いた口が塞がらなかったが一
ヶ月もコンビ組んでればさすがに慣れる

（そう、慣れた。だから今鼓動が早いのは走った後だからだ）

誰に聞かせるでもないが、いいわけじみた言葉を心の内でつぶやきながら気持ちを切り替え

薄れ消えゆく火のついた車輪へ視線を移す

火のついた車輪——火車^{かしゃ}、妖怪である

ほんの少し前までは妖怪が実在するなんて俺は思ってもみなかったし自分が鬼の血を引いているなんてことも知らなかった。

それとなく両親に尋ねてみたが、芳しい反応は返ってこなかったの
で多分知らないのだろう

まあ、とぼけている可能性もないではないが：

この街では三週間ほど前から、原因不明の怪異が発生している
とりあえず今回倒した火車で放火事件は終わりをつける筈だが怪異
自体が終わるとは思えない

俺は肩を並べて帰路につきつつ、綾乃にそのことを尋ねてみた

「：なんともいえないな、噂で聞いた光る地面の話、あれも火車の
仕業なら今聞く限りの噂話はほぼ片付けたはず：やはり原因を見つ
けないことには解決しないのかもしれん」

「はあ、高校生ライフがこんな破天荒なものになるなんて想像
もしてなかったぜ」

「それはお互い様だ、キミと再会してからずっと私だって思いもよ
らない事だらけだよ」

「うっそだ、最初の頃の不良をぶっ飛ばしてたのは日常茶飯事だ
ろ」

「：私は文武両道を志し、日々鍛錬に励んでいるので暴力事件を起
こしている暇などともありません」

俺はすまし顔をして歩く綾乃の横顔を、半眼で睨みつけていたが数秒後二人そろって吹きだした

「綾乃、お前が強いのは分かっているけどアッチコッチで恨みを買うのはやめてくれ、さすがにあんな思いは何度もしたくない」

「校舎裏に呼び出されて十八人に囲まれたときのことか？本来五十三人に囲まれてやつらの溜まり場に連れて行かれるところだったんだ、一度に戦う数を十八人にまで減らした頭脳プレーを褒めてくれ」

「褒めれるか！その前に恨みを買うんじゃないよ！」

「ま、まあ確かに、日々の積み重ねがあそこまで大事に成るなんて私も予想外だったが…あゝ、継続は力なりという言葉のいい例だと思わない？」

「ポジティブすぎるわ！しかも絶対いい例ではない！」

さすがに綾乃も自分の口にした事を本気で言っている訳ではないらしく、気まずげに視線を明後日の方へと向けている

（まったく、あの頃はまだ鬼の力も使えなかったのに、よくもまあ二人だけで切り抜けたもんだ）

まあ、鬼の力など本気で振るえば一撃で重症間違いないと思うが再会してからというもの、綾乃に振り回されっぱなしだが、鬼の血など引いている時点で妖怪関連は無縁とはいかないのかもしれない

（ほんと、何でこんな事になったんだか…）

夜空に月を探しながら、そんなことを考えつつ歩いていると綾乃の声が聞こえた

「そう、だね。キミにはとてもお世話になってる」

「あん？別に恩に着せるために思い出させたわけじゃねえよ」

「そうだろうけど、一度お礼を言っておいたほうが良いかと思って」
「ん、あー気にすんなよ。友人だろ俺ら」

改まって言われるとなんとも居心地の悪い、背骨を走る感覚に従うとおかしな踊りを披露してしまいそうだ

「いや、考えてみたらいつの間にか有耶無耶になってしまって、いつの間にか昔のようにキミが隣にいるのが当たり前だと思っていた」
「だく、気にスナナ」

感覚急上昇、コイツは俺を躍らせたのか！しかめっ面になるのが抑えられん

しかし、綾乃は立ち止まって手を後で組み、更に追い討ちをかける
「この一ヶ月色々と助けてくれてありがとう、キミと再会して、またこんなに仲良くなれたことが私はとても嬉しい」
（ちよっと待てその顔は反則だ）

本当に嬉しそうに微笑むその姿に鼓動が早くなるのを抑えられない
照れくさくてまともに見返すことが出来ず再び夜空に視線を向ける
（これで後ろ手に持っているのが木刀でなければ一発ノックアウトだったかもしれない）

幼少期ボッコボコにされた記憶があるだけに、今の姿にときめくなど不覚としか言いようがない
そんな時、それが視界に入った

「紅い？」

夜空にある月が見たこともないほど鮮やかに紅く輝いていた
驚きに動きを止める俺に向かって綾乃が叫ぶ

「亮平！足元！」

戦闘中のような警告じみたアヤメの声に足元を見ると地面が輝いて
いる

「これは、魔方陣！？」

西洋の魔術の知識などないが、足元に広がるモノはそうとしか言い
ようがなかった

あっという間に光度が上がり、強烈な光の本流の中に俺たちは飲み
込まれた。

第一話 これでも世界は平和だった（後書き）

とりあえず始まりました

生暖かい眼差しで見守ってやってください

（＾―＾＜

現在の登場人物紹介

現在の登場人物（？）

＊武宮亮平 たけみや りょうへい

年齢…16歳 性別…男 種族…人間（人5…鬼5）

中肉中背の若干目つきの悪い男

装備…学生服

トランシーバー

ハンカチ

サイフ

スポーツドリンク（開封済み）

腕時計（鬼化の時にベルトがはじけるのでズボンに入れている）

必殺技…『鬼ノ血の覚醒』：鬼化することにより攻撃力&防御力が大幅に上昇

身長…177cm 体重65kg

幼少期、山背道場やましろうどうじょうで古武術を学ぶが小二の時に転校

家庭の事情で4月に生まれた町に戻ってきた

この時までは普通の人間だったが

4月に起きた事件で幼少期に掛けられた術が解け鬼化できるようになる

5月初頭夜中に異世界へ飛ばされる

＊山城綾乃 やましろう あやの

年齢…16歳 性別…女 種族…人間

黒髪・黒目、ぱっと見凜とした美少女、クールな印象だが最近素

直な面も

既に亮平とは大分打ち解けている

装備…学生服

トランシーバー（亮平から借りた）

ハンカチ

コンパクトタイプのソーイングセット

サイフ

木刀（火車討伐のために持ち出した、愛用の武器というわけではない）

秘伝の傷薬

寸鉄？（家の蔵にあった神秘的な色合いの金属）

必殺技…『防御力無効』…精神集中した彼女の一撃は魂を直接殴ることが出来る

身長…163cm 目算C→Dカップ

山背道場の一人娘、祖父と共に暮らす

幼少の頃から山背道場で祖父に鍛えられてきた

孫馬鹿な祖父により徹底的に柔法を中心にカウンターを叩き込まれた

攻撃はまだ掌打しか教えてもらっていないが、武器も扱えぬわけではない

亮平と共に異世界へ飛ばされる

ちなみに、4月に亮平と再会するまでに得た二つ名は《孤高の殲滅者》と《氷の女王》

＊山城彦斎やましろ げんさい

年齢…72歳 性別…男 種族…人間

長い歴史を持つ山背道場の現師範

孫馬鹿だが武術に関しては人が変わったように厳しくなる

綾乃が道に迷った亮平を連れて一時帰宅したところ問答無用で亮平を蔵に叩き込んだ

まだまだ衰えぬ武術の達人

数年前孫が『防御力無効』を初めて使い、動きからは想像できない威力を発揮した。あまりの

不可解さに師弟そろって首をかしげた。

※この物語に登場予定はありません

現在の登場人物紹介（後書き）

六話投稿後、書いておいたほうがいい事と書き忘れを追記

第二話 黒き石の部屋

強烈な光により視界を奪われ、再び見えるようになったのは十秒後か三十秒後か

過ぎた時間に確証を持ってないまま辺りを見てみると、そこは壁も床も天井も黒い石で出来た部屋だった。

部屋の中にはフード付きの黒いローブの男達、顔の作りからして日本人ではなさそうだ

四角い部屋の中、角に四人の黒づくめが立ち、目の前には金の刺繍入りの黒いローブを羽織った老人が扉を背にして立っている。部屋の中にいる俺達の以外の五人が会話し始めた。

「人間か？」

「いや、陣から出てきたのだ、おそらく化けているのだろう」

「しかも二人：いや二匹？とは珍しい」

「召喚の陣が暴走しかけたときにはどうなるかと思ったが、これは良いアクシデントだ」

「：時間が無い、急ぎ《首輪》の詠唱に入る」

（なんだこりゃ、場所が、移動している？）

彼らの言葉を信じるなら今起こったことは召喚

ゲームならば良く見かけるが現実に体験するのは初めてだ

最近妖怪を狩ってきたが、俺達は手から火が出たりするようなビツクリ人間ではない

今までは、あくまで日常に妖怪が紛れ込んで来ただけだった。

（いよいよ日常ってヤツがイカレて来たか？）

「まずい、時間が無いのだ！早く取り押さえろ！」

右手を向けてきた黒ずくめ達に対し綾乃は右側にいる男に向かった姿勢を低く一足飛びに間合いをつめ、相手の右手を左手で逸らし右肘を肋骨へと叩き込む！

骨にヒビでも入ったのか、痛みに怯んだ男の左腕を掴み捻りあげながら左右の角の男達への盾とする

一方、綾乃が老人を倒した後亮平は苦痛が薄れていくのが分かった。

（治りきつちやいないが時間がねえ）

『目覚めろ、鬼ノ血！』

鬼への変化と共に左右の男達が叫ぶ

『光よ！』

『雷よ！』

最小限のスペルで最速の魔術を放つものの
亮平が突き出した両手はそれぞれの魔術を受け止めた。

（左手はちと痺れただけ、右手も軽い火傷か、なら問題ねえな！）

『ガアアアアア！』

お返しとばかりの、咆哮は物理的な衝撃波を伴い男達を石壁へと叩きつける。

（まあ咆哮これの衝撃波はオマケみたいなモンで威力なんざほぼ無いが、挨拶代わりにゃなるだろ）

「クソッ、やっぱり化けていやがったか。」

「ぐ…なんだ？あの姿は、トロールか？デーモンか？」

「つー、クソッ、やっと土壇場で儀式が成功したと思ったのに。」

苦々しげに睨むもの、痛みに顔をしかめる者とさまざまだが、
部屋の中は奇妙な膠着状態へと陥^{おちい}った。

（今なら会話が可能か？）

視線で綾乃に話をしてくれと頼む

俺のの意を汲んでくれた綾乃は四人の黒ずくめに声を掛けた

「すみません、今は自衛のため攻撃を行いました、私達はあなた方を好んで攻撃する意思はありません。私達を元の場所へ戻してくれませんか？」

綾乃の言葉に、四人は視線を交わす

「悪いが讓ちゃんはまだしも、その怪物を帰す訳にはいかない、我らには力が必要なのだ。」

「戦力は少しでも欲しい、そういう意味ではその娘も帰す訳には…それに――」

「――いや、今私達と言ったな？もと男、お前は会話が可能か？」

仲間のセリフをぶった切った黒ずくめCのセリフで黒ずくめ達の視線が亮平へと集中する

刺激をしないように交渉を綾乃に任せていたが喋るしかないようだ
喋れないふりをする利点も無いしな

「もと男とか呼ぶのはやめろ、俺が男を辞めたみたいじゃねえか」

あからさまに、ホッとした様な顔をして話しかけてくる黒ずくめC
「いや、話せるならちようどいい。どうだ？お前が力を貸してくれ
るならそっちのお譲さんは帰してやる」

「…力を貸すってのは、どういうことだ？」

「文字通りの意味だ、最近隣国に仕官した召喚術士が強力でな、下
級とは言え魔物を一人で数十体も操るのだという、やつを倒すのを
手伝って欲しい」

ためえらで勝手にやってろ！と叫びたくなる気分を抑えて別の事を
尋ねることにする

黒ずくめ達はチラチラと倒れた老人へ視線を向けているようだ

「隣国ってのは？」

「我がデュゴス王国の隣国シェルトリー共和国だ」

念のため聞き覚えがあるかと綾乃の方をしてみるが彼女は首を振っ
た。

さつきから嫌な予感しかしない、もしそうなら自分達には打つ手が
無いことになるが

聞かないわけにはいかないだろう

（まあ、見た目が外人のこいつ等が仲間内の会話まで日本語で話し
てくれるいわれは無いよな）

「んじゃ俺からは最後の質問だ、ここは異世界か？」

「ああそうだ、お前達が元いた世界とは別の世界だ」

（はあ、会話が通じるのは良いが、これはマズいな…従うしかな
いか？）

「い、いい加減は、離してくれないか？」

綾乃に腕を捻りあげられた男が青い顔で言う、どうやら肋骨が痛むらしい

綾乃が手を離し、俺がそいつを仲間達の方へ押してやる

また肋骨が痛んだらしく、すごい目で睨まれた

綾乃と小声で会話をしてみる

「どうする？さすがにこれは手に余りそうだぞ」

「そう、だね。でも私はまだ気になることがある」

「ん？」

綾乃が一步前に出て黒ずくめ達に質問を投げかけた

「今度は私から質問があります」

「いいぞ、なんでも聞いてくれお嬢さん」

「最近、私達が住んでいた町で路面が発光する現象が目撃されています、あれはあなた方の仕業ですか？」

「路面が発光？そんなの魔方陣を起動すればいつだって光るだろう？
全て我々の仕業かと言われてもな…」

「私達の世界では路面があのように光るなんて事はまず無いことなんです」

「ん？そうなのか？じゃ何度か失敗したし、その時のものかな？一応道だけは繋がってたのか」

その言葉を聞いて綾乃の表情が険しくなる

「その発光は複数回目撃されています、私達のようにこの世界へと連れて来た人たちが他にもいるのですか？」

「へ？ いや、俺らの召喚は今日が初の成功だけど…」

思わず、という感じで答える男はこれが嘘ならばなかなか腕の立つ役者だろう

（別口か失敗の数だけ光ったのか、こちらも正確な数を把握しているわけではないからなんとも言えないか…）

「ふう…それで、どうやって送還するんですか？」

「ああ、それはベルドルフ老師が起きればいつでも」

「ちよっと待て、綾乃の本気の《防御力無効》を受けたやつは意識が戻っても半日は起きれないぞ？」

それを聞いたとたん、黒ずくめの男達の顔に狼狽が浮かんだ
慌てた黒ずくめの一人が何か言おうとしたときそれは起こった

ドン！！！！

右側にあった唯一の出入り口の扉が吹っ飛び、緑色の何かが部屋に
転がり込んできた

「トッ、トロールだ！」

黒ずくめの男の一人が裏返った声で叫んだ

飛び込んできたトロールは目の前に倒れている老人を見つけると笑
みを浮かべ、老人を抱えて部屋を飛び出していった。

部屋にいた他の者達には見向きもしない

肥満体型であるにもかかわらず、意外なほどの素早い動きだった。

呆気にとられた黒ずくめ達が我に返り、慌てて後を追おうと一歩踏み出した瞬間

狙ったかのように再び何かが飛び込んできて先頭の黒ずくめに食ら

い付いた

「ア、アースリザード！？何でこんなところにっ！」

男達の声は紛れも無い悲鳴だ

頭の高さは人の腰辺りまでだが、長さは7mを超えるゴツゴツした巨大なワニだ

体が長すぎるため、部屋に体が入りきれていない

これには俺らも悲鳴を上げかけたが、注意を引いてはまずいと思い悲鳴を飲み込む

「てめえ！ジョットを離せ！」

「無理だ！やつに噛み付かれて生きてるはずが無い！最下級とは言え竜種だぞ！」

現にジョットと呼ばれた青年はアースリザードの口を境にありえない方向に人体を曲げており

その口からは赤黒い液体が流れ落ちている。

仲間の吹き出した血を浴び、喚き散らす黒ずくめ二人の後方

肋骨を痛め後に下がっていた男が、顔にかかった仲間の血をぬぐいもせずこちらを睨んでいた

いつからかは分からないが、おそらく視線の先にいるのは綾乃だろう
どうやら先の一戦が彼のプライドを傷つけたようだ。

仲間の死すら眼中に無いらしく、何事か口を動かすと姿を消した。

瞬間移動か不可視化か…

それを見た俺は我に返り、小声で綾乃に声を掛けた

「とりあえず俺らも脱出するぞ、背中に乗って俺の靴を持っていたくれ」

「わ、わかった」

さすがに普段冷静な綾乃も目の前の光景には動揺を隠せないようだ
視界の端に黒づくめの二人が部屋を遮断する障壁を張りアースリザ
ードの体当たりを防いでいるのが見えるが顔が真っ青だ、長くは持
たないのかもしれない。

靴を脱ぎ腕部の鬼化を解いて下半身を重点的に

俺のこの鬼化は普段服が破れないように調節して変化^{へんげ}しているが、
今はそんなことを言ってられそうに無い。

綾乃を背負った俺は壁を蹴り、アースリザードの背を飛び越えて、
再び壁を蹴る

この建物の作りなどわかるはずも無いが、通路をうろつくゴブリン
どもの上をましろの如く跳びはね出口を目指す。

第二話 黒き石の部屋（後書き）

ギャグを挿もうとしたんだけど

思いついたネタが初見は笑えたんだけど

二度目以降が笑えない程度だったんで書き直しました。

（^ー^；

ちよっと長かったかな？

第三話 青黒き炎

床も壁も等しく足場として石造りの廊下を駆け抜ける
通路ではゴブリンを時々見るくらいだ

（さっきから窓が無い、ここは地下か？）

角を曲がり部屋は無視して、ひたすら階段を探して走り続ける。

さっきまで居た部屋でのやり取りを改めて思い返してみるが

意識に無意識のフィルターのようなのがかって感情が抑制されていたような気もする

自分は冷静に振舞えていただろうか？

状況に流されていただけではなかっただろうか？

聞いておきたかった事はあれで良かったのか？

背中に当たる胸の感触はワッホーイ！

「亮平、真面目な顔をしているところ悪いが……何を考えている？」

「何でもありませんです大佐！」

（やっべー、なんで気付くんだよ。ポーカーフェイスは完璧だったはずなのに！）

それを言ったら背負っている人間の顔を、背負われている人間が見るのはまず無理なのだが……

階段を見つけて駆け上がり、途中に居たゴブリンは盾の上から勢いのまま全力で蹴り潰す

なおも走り続けていると、綾乃が小さくつぶやいた。

「見捨ててきて良かったんだろうか？」

それは人に聞くというより自分に問いかけるような言葉

元の世界では、恨みを買ってでも弱者のために戦ってきた彼女の言葉
こっちの世界に来て、目の前であっけないほど簡単に人が死ぬ所を
見た

彼女も判ってはいろのだろう、次に休むことができるまでに、どれ
だけの戦いが有るか判らない今、強敵との戦闘は回避するべきだとい
うことは

そうでなければ次に死ぬのは自分達なのだ…

判っていても、それでも今まで過ごした日々が問いかけるのだ、
それでよかったのか？”と

「…あいつらが、異世界にまで助けを求めてきたというならその相
手は俺だ。俺が判断して蹴ったんだ、お前が悩むことじゃない」

こんな言葉はなんの慰めにもならない、別の人に対して助けを求め
ていたのだとしても、本当に危ないと思うなら手を伸ばすのが彼女
なのだから

だから、

「それに見ただろ？ やつらの一人が消えるのを。あいつらは魔法使
いだけ、姿を消したり瞬間移動したりして、今頃みんな上手いこと
逃げてるさ。それとも最初に消えたやつが背後から奇襲をかけて逆
に倒してるかもしれないぜ。心配するだけ損だって」

心にも無い希望的観測を言っておどけてみせる

地下には少数しか居なかった魔物も、上の階には倍近く存在し、鈍
色の甲冑を着た戦士達が魔物と戦ってる姿が見える

「あいつらだって、必死に生きてる。今は俺らもここを切り抜ける
ことを考えよう」

背中に乗ったまま彼女は、軽く息を吸って、吐いた

「…ありがとう」

耳元で囁かれた言葉は、戦の中でも確かに聞こえた。

（実際は考えてる余裕なんて無いけどな！）

魔術師達を置き去りにした自分達にとって、どちらかが味方なんて事はありません

少し進むと左手側正面に鈍色の鎧とオリーブの鎧、二種類の鎧を着た戦士達が互いに争いあう光景が見えた。戦いの激しさは今までの比ではない

（こっちが主戦場かよ！）

「オイ！お前達！そこで何をしている！」

声の方を振り向くと、他の兵より立派な鈍色の鎧の男を中心とした一団と目が合ってしまった

（まずい！）

「亮平！右手側5m先に窓がある！」

言葉を聞くやいなや、きびすを返し走り出そうとした俺に声がかかった

「待て」

その声にゾツとした俺は思わず振り向きかけるが、綾乃の声が叱咤する

「走れ！」

首筋をチリチリとした感覚が襲うが、全力で窓へと向かう背後からはギインという金属同士がぶつかる様な音が聞こえたが、そのまま窓を突き破って跳び出した。

逃亡した謎の二人組みに静止を促した男――ガルドは楽しげな笑みを浮かべていた。

「ふむ、逃がしたか」

「見たことの無い衣服でしたが何者でしょうか？」

「おそらくは、ベルドルフのやつが呼び出したものだろう。そこそこ使えそうだが戦局を覆すほどではなかったようだな」

「：しかし敵に使われるのはまずいのでは？」

「逃すくらいなら殺しておこうと思ったのだが：逃がしてしまった以上は仕方あるまい、放っておけ。それより我らも撤退戦をはじめろぞ！」

「――ハッ！了解しました！」

（無事この戦を潜り抜けたら、いつか戦ってみたいものだ）

内心大きくなる笑みを隠し、ガルドは指揮官の顔に戻った。

この戦い、明らかに敗戦であるにもかかわらず彼の表情から不敵な笑みが消えることは無かった。

窓から飛び出した亮平達は外に居た兵士達を二人で蹴散らした。実は綾乃の《防御力無効》は生物や霊体に有効な能力だが、綾乃自

身が物理的な束縛を脱する訳ではないので、間に金属等を挟むと力が奥まで届かずに威力を十分に発揮できない
だから鎧を着た相手は俺が鬼の力でぶっ飛ばし、綾乃には殴りやすそうなやつを相手にしてもらった。

「ところでその木刀折れてないか？」

「さっきの隊長らしき男が投げた剣を叩き落したんだが、その一撃が致命的だったらしい、鉄心入りだったのだが…」

「入ってなかったらやばかったかもしれないってか？あの隊長、たぶんアースリザードより強いよな？」

「お爺様ほどではないと思うが、正直あの殺気は凄かった」

「…現実逃避はこのくらいにしてどうすつか？さすがに、この城壁の高さじゃ垂直跳びは無理だろ、10m近くないか？なんでこんなにしたけーんだよ」

「だが、正規の出入り口は制圧されていると見たほうが良いだろ…亮平、壊せないか？」

「え、ええええ石の壁だぞ？たしかに、全力で物を壊そうとしたことは無いけどさ…」

だが他の手を思いつけない以上やるしかないようだ。

後方は綾乃に任せ、壁の前で精神を集中する

時間をかければより脱出が困難になる、壊せそうな手ごたえでも回数が必要であれば同じ事

（一撃で見極める！）

左足を前に、右足を引き、弓を引き絞るが如く腰を捻り右腕を捻り突き出すッ！

第四話 内と外 静寂と怒号

木造で出来た家々が建ち並ぶ路地裏の道をひた走る影達

場所によつては火事も起きている街中を刃物を持った男達が怒号を上げながら駆け回る

「城の方は正騎士様に任せて俺たちや残党狩りだ、家の隅々まで探しまわれ！ だし！ 教会には手えだすな、後々面倒だからな！」

「「オオーーー！」」

「なんかやってる事といい見た目といい、兵士というよりは野盗っぽいやつらが居るな？」

「歴史の教科書に、兵に十分な見返りを与えられない場合、従軍の報酬として敵から奪ったものはそのまま各々の物として良い、という略奪行為を推奨する場合もあったとか……」

「うーん、金属色そのままの鈍色の軍より、オリーブ色の軍の方が鎧に金をかけているのかと思っただが……城の外で暴れてるやつらは皮鎧を着けていれば上等で、鎧など着てないやつもかなりいるみたいだな、民兵と違ってやつかね？」

城壁破壊の後集まってきた兵士達の目から、ギリギリで路地にとび込んで逃れた俺達は、区画整理など何の話？ とでも言うような迷路じみた住宅街の真っ只中で息を整えながら聞こえてくる声に耳を済ませていた。

『鬼ノ血の覚醒』を行なっても、角さえ隠せば体格の良すぎる男で通用しそうだが、今は帽子も無いため一時的に変化を解除している。部分変化は戦闘中に切り替えられるほど早くは行なえないが、覚醒するだけならそれほど時間はかからない。奇襲を受けた場合綾乃より行動がワテンポ遅れるだろうが、それを差し引いても休憩した

かった。

「まったく、本物の刃物で斬りつけてきやがって…綾乃は良くあんなの相手に冷静に立ち回れるな？」

「私の場合は、稽古でお爺様が真剣で斬りかかって来る事もあったからな」

「あ、あれだけ溺愛してても、稽古にゃ容赦ねえな爺さん…」

俺が問題無く敵を蹴散らせたのは、間違いなく『鬼ノ血』のおかげだろう

覚醒時の高揚感と、剣を通さぬ肉体。殴られれば痛い殺そうとして斬りかかって来る相手の攻撃が痛い程度ですむなら良い方だろう

「…亮平、おそろくだが鬼の力を過信しない方がいい。城で出会った隊長らしき男の投げてきた剣、剣の腹に木刀を叩きつけたにもかかわらず木刀が数箇所切れていた…あれも魔法の一種だとすれば剣でキミの体を斬れる場合があるかもしれない」

「魔法と剣か…ゲームで言えば付加魔法^{エンチャント}ってやつかね。ゲームならさっさと回復魔法を覚えたいところだけど、俺らの場合はまず着替えだよな…この服じゃ目立ちすぎる」

「むう、私にはゲーム知識は無いが着替えというのは賛成だ、今は少しでも注目を浴びたくない。この世界の一般的な服が欲しいが…どうやって手に入れる？サイフはあるがこの世界の通貨は持っているぞ？何より戦時中だ」

「…気は進まないが、奴らと同じようにそこらの家から盗むか、死体から失敬するしかねえかな？」

「……仕方ないか。今すぐになると私も他の案は浮かばない」

「傷害罪に窃盗罪、俺らも今日からフダ付きかー」

「……」

「おめえら、見慣れない服着てんな？」

「!？」

気の滅入る話をしていたせいか周囲への警戒が疎かになっていた舌打ちしたい気分を抑え立ち上がると、左側に五人の野盗にしか見えぬ男達

そいつらの視線は自然と綾乃に集まった。

「お！妙ななりをしちやいるが、この女高く売れそうですぜ親分」

「おおー！すげえスカートが短けえな！讓ちゃん、そんな格好じゃ襲ってくれて言ってるようなもんだぜ？それとも隣の兄ちゃんを誘ってたとかか？」

「親分、若すぎやしませんか？アツシはもっと熟れた女の方が好みなんです…」

「手前えの熟女好きな趣味なんざどうだっていいんだよボケ！よく見てみる、顔の作りは異国風だが美形にや違えねえし、そこらのガリガリな村娘よりよっぽど胸がある！貴族の隠し子とでも言って売り出しや箔も付いて間違いない今日収穫の中で一番の高値になるぜ！」

「…フトモモが俺を魅惑する」

野盗ども（もはや決定！）の視線が露骨に綾乃の体を這い回る

綾乃のスカートは学園の規定に沿ったもので短すぎるようなことは無いのだが、おそらく時代が違うせいだろう野盗どもの獣欲を煽っているようだ

俺達は一度視線を交わし互いの表情を見る

野盗どもは相変わらず綾乃ばかりを見ている。

「今回、勝ち戦なのは良いが敵国が貧乏すぎてロクなもんが盗れなかったんだ、讓ちゃんをどうするかについては後で決めるとして。」

おう、讓ちゃん痛い目にあいなくなけりや——」

「——『目覚めろ！鬼ノ血』みぐるみ置いてけや！！」

「「「ぎゃー——！化けもんだー！！！」」」

綾乃の前に一步踏み出し、鬼化と共に恫喝すると悲鳴を上げて逃げ出すもの、腰を抜かすもの、親分を盾にしようと後に隠れるもの……唯一マシな反応をした親分も一步あとずさって子分達にしがみつかれている

「おおおおお、おまえら！なな、さけねえ姿見せてないで——」

跳び上がった亮平が家の屋根を蹴り、逃げようとした一人を空から強襲

無防備な後頭部を優しくはたいて気絶させる。

今の跳躍力を見て逃げられないことを悟ったのだろう

青い顔をした野盗たちは自分達を跳び越えた亮平へと視線が集中する。

親分が次の声を上げる間もなく、後ろから近づいた綾乃に意識を刈り取られた。

「いやー♪ちようど良い時に良心が痛まないで済むやつが出てきて助かったぜ」

「私もコイツ等から奪うことに反対する気は無いが、女物が無い上に臭うな」

「あー、んじゃとりあえず全員脱がして、今着ないやつは近くの川にでも行って洗うか」

「ん？コイツ等硬貨を持っているようだ。全員分集めれば少しの額にはなるか？」

さっきまでの暗い表情など幻であったかのように身包みを剥ぐ亮平

と綾乃

互いに負けず劣らず逞しい精神の持ち主のようだ。

出てきた硬貨は、銀貨18枚に銅貨378枚

二人はとりあえず、五人の中でまだしも清潔そうな服を選び、目の前にある家の中で背中合わせに着替えを始めた。

「貨幣基準が分からんからなんとも言えないが親分は結構持ってたな」

「どうする？この世界の基本的なことを聞くために一人連れて行くか？」

「おお！？あの真面目な綾乃が誘拐発言！はやくもこの世界に毒されてる！？」

「…キミは、いくら魔法がある世界とはいえ、「異世界から来たので、ちよつとこの世界の常識教えてもらえます？」なんて頭の痛い発言をしると言うのか？」

「まあ、一般人に嘘をついて聞くのも気がとがめるか。そうなるにあの誰が良いかね？俺としては…コシヌケーかな？」

「…誰だそれは？」

「親分は一番物知りかもしれないけど捕縛されて話をするとなるとプライドが邪魔しそう、親分を盾にしていたやつらは弱腰だけだったか、逃亡したやつは俺が気絶させたからいつ目覚めるか分からない、となると腰を抜かして綾乃に《防御力無効》を受けたやつが精神面と持ち運びのしやすさで一番かな？と思ったんだけど、どうだ？あの一撃なら意識が戻っても半日は動けないだろう？」

「なるほど…気になるのはこの世界の住人にも同じだけの効果時間を得られるか？ということと、さっきキミが言っていた回復魔法だな、私の攻撃を癒せるかもしれない」

「あゝ確かに」

「・・・」

「・・・」

（あゝもゝ、いくら非常時だからといって背後で女の子が着替えて
と思うと落ち着かねえー！なんか喋ってないと間が持たん！）

「あゝとりあえず、俺は着替え終わったぞ」

「そ、そうか、もう少し待ってくれ」

（衣擦れの音が心臓に悪いぜ…）

幸い綾乃の着替えもそれほど間を空けずに終わったが、二人とも少
々血行がよくなった顔を落ち着けるのに少し時間が必要だった。

第五話 尋問

ボロボロの野盗の服へと着替えた亮平と綾乃はコシヌケーを担ぎ負傷兵を装って後方へ下がるふりをして街を出た後、街道を外れ森の中へ

「いくら堂々としてれば怪しまれないからって、周り全部が敵かと思ふと心の休まる 때가 ねえ…」

「さすがにここまでくればすぐには見つからないと思うが…」

「時間はあまりかけられないか？ んじゃ尋問タイムといきますか」

「ん、ちょっと待て——っは！」

——ズン

「おお！？ なんだ——ってさっきの二人組み！ お、親分は？ 皆はどうした！？」

「埋めた」

「う、うめた…！？」

絶句するコシヌケーに向かい容赦なく亮平は続ける

「さて、ちつとばかりテーマに聞きたいことがある。とりあえず頭が無事かどうか基本的な質問からするが、使えねーと思ったらすぐに仲間と同じ結末を迎えることになるぜ」

「な、何を聞きたいってンです！？ アツシは何もしらねえっスよ！」

「知ってるか知らないかは、聞いた俺らが判断する。テーマはグダグダ言わず答えろ！」

「ひいひい！」

鬼化しながら恫喝すると、明らかに脅え始めた。

人を脅すなんて不慣れなことこの上ないが、鬼化の迫力がそれを補って余りあるようだ。

鬼化はこちらの言葉をムリヤリ通す時に使うようにしようと思ひひとまず解く

尋問なんて初なので、ここまでくる間に二人で考えていた事を聞いていく

「テメーはシェルトリー軍の一員か？」

「そ、そうです。といってもデュゴスとの戦用に契約を結んだ傭兵ギルドのモンですから、軍の上のほうのことを聞かれても何もわからねっスよ!？」

「いいんだよ、俺が次の質問をするまで、テメーは思いつくまま喋り続ければいい」

「わ、わかったッス」

「んじゃ次だ、貨幣ついて喋れ」

「へ?」

ギロツ

「は、はい喋りばふ!ど、銅貨は100枚で銀貨1枚分であり、銀貨1000枚で金貨1枚になるッス!銅貨10枚ゝ16枚が一食にかかる値段なので金貨は商人や貴族などしか関わり合いの無いものなんス」

——こうして、もっともらしい質問の間に日常生活に必要なことを混ぜ、これで良いのかとビクビクするコシヌケー（本名ロベルトらしいが名前負けしてる気がする）を軽く睨みながら尋問は続いた。

この世界では50年ほど前まではヴェルパシア王国という大国があったらしいのだが、亜人との戦争が起り滅ぼされたのだという。その後各地で有力者が立ち上がり5つの国が出来た。

基本的に亜人を、街中で見えることは余り無い、余りと言うのは稀に奴隷として売られていることがあるからだ。街道を外れた森の中など彼らの集落があるが人間は亜人を恐れているので近づくものはない、これは冒険者より傭兵が多い大きな理由にもなっているらしい。亜人は人間より身体能力に優れており、見た目は様々だが総じて人とモンスターの中間のような姿なのだという。

「お前から見て俺は何に見える？」

「…亜人ツス」

「根拠は？」

「？モンスターは、上位の竜や悪魔を除いて基本喋れないらしいツスから…」

「なるほど…」

「???」

重要そうな話と、肩透かしを食らうような当たり前の話を交互に長々としていたおかげでコシヌケの恐れは当初に比べて少なくなってきた。

「さてっと、大体は聞けたかな？他に聞きたいことはあるか？」

「…いや、もういい。後は私達だけでも何とかかなと思う」

「りょーかい、んじゃぼちぼち最後の質問だ」

ゴクリー―あらたまった亮平の様子に、にわかに緊張感が高まった

「お前はこれからどうしたい？」

「は？―あゝ、これからツスカ？生きて帰れたとしても傭兵はこ

りごりッス。とりあえず家に帰って畑を耕す予定ッス」

「お前、畑のある家があんのか？」

「実家ッス。もともと地元の友人に誘われて一緒に今の傭兵団に入ったんすが、数日前の戦いでそいつは死んじまったッス。アッシにはもう傭兵を続けていく理由もないんで……」

「そうか……真っ直ぐ行けば戦場に出る、後は好きにしろ」

「……えっ！？このまま行ってもいいんすか？」

「他の仲間は、お前らと遭遇した近くの家の菜園に頭だけ出して埋めてある。さっさと行け」

「――ありがとうございヤス！ってあ、あれ？なんか体が動かないッス」

「あゝそういや、あと2時間ほどは動けないんだっけ、んじゃ俺らがどっか行くか」

「ま、まってほしいッス。戦争中で騒がしいっても森の中はモンスターとか亜人とかが怖いッス――！」

会話中も辺りに気を配っていたが、近くに獣などはいないようだったし大丈夫だろう

亮平と綾乃はロベルトを置き去りにして森の中を暫く歩き、今後について話しを始めた。

「召喚や、ベルドルフ老師をさらったやつについてはまるで分からなかったな」
おひめさま

「仕方あるまい、どうやら皆が魔法を使えると言うわけではない様だし」

「はゝ、当面は資金を集めながら情報収集かね」

「今は夕方のようなだが、元の世界を発ってからそろそろ5〜6時間たっていないか？」

「って事は、元の世界ならそろそろ夜明けか？どおりで眠いわけだ」
「出来ればさっさと私達を知る者がいない隣町へ行きたかったがこ

れでは…」

「だな、…よし！そろそろ戦いも終わってるだろ、戦勝で浮かれるところに行って食べ物を確保して寝られそうなところを見つけようぜー！」

「大胆な策だな、だが現状では一番いい気がする」

二人は、話し合ったとおり勝利に沸くシェルトリー軍の宴で食べ物を手に入れ、眠気を堪えながら食事を終えて

井戸の水で服を洗い、なるべく大通り沿いに近い家に上がりこんで室内に服を吊るしてベッドに倒れこんだ。

警戒のため二人とも同じ部屋、どこるか同じベットだったが何か考える間もなく泥のような眠りについた。

第五話 尋問（後書き）

今回は、ラブコメ成分が足りない気がする！
次回はその分増量したい！

※予告ではありません

眠気と戦いながら書いたせいか書き忘れがW

第六話 無音の一撃（前書き）

学校↓妖怪狩り↓異世界召喚↓脱出↓尋問で疲れ果て眠気に負けて
ベッドで泥のように眠った主人公達
その翌朝です。

第六話 無音の一撃

綾乃が目を覚ますと40cmほど先に亮平の顔があった

（りょーへー？あ、そうか、ここは――）

彼の服を見て思い出す。昨日だけでいろんな事があった。

未だ辺りは暗いが、窓を開けてみると空が明るくなり始めていた。

（海外旅行に行く事も無く、異世界に来てしまった、か）

なんとなくおかしくなり、亮平を起こさないよう声を殺して笑った

（私の世界は家族と、亮平を中心にしてまわってたから、今はまだそんなに寂しさは沸かないけど、亮平はどうだろう？）

もちろん元の世界に友人が皆無と言うわけではないが、不良相手に暴れたり日課の稽古が忙しく、親しい友人は他にいなかった。

再びベットに寝転がり見るともなしに亮平の顔を眺める

ふと、二人つきりという状況が頭に浮かんだが、今そんなことを気にしてギクシャクするのは避けたい

（仲良くやっていこう相棒、キミと一緒にならきつとなんとかなると
思える）

亮平の親指を握って、私は再び眠りについた。

朝日が昇り、部屋の中も明るくなって少したった頃
亮平の朝は指の関節技から始まった。

「なんだなんだ！？俺なんかしたのか！？ちよつ、起きてくれ綾乃
！痛い、イタイイタイイタイ！」

何がどうなっそうだったのかまるで分からないが、彼女の技は今日も冴えているようだ

「謝ります！なんだかよく分からないけど謝るから！綾乃さん？綾
乃様！関節技やメテーーーーー」

異世界の初めての朝に亮平の絶叫が響いた。

「まったく、朝っぱらから『千里引き』なんてマニアックな技をか
けられるとは……」

「ゴメンナサイ」

気まずげに謝る綾乃

どうやら意図したものではなかったらしく目を覚ました綾乃はすぐ
に解いてくれた。

井戸水で顔を洗い、昨夜多めに確保しておいた料理を綾乃が釜戸で
暖めなおした。

この時ばかりは「白米は釜戸に限る！」とか言って電子ジャーを買
わなかった爺さんにグツジョブと言わざるをえない。

その間に亮平は洗濯物の回収など準備を整え、二人は手早く朝食を
終えた。

「さて、本来ならシェルトリー共和国に入っの情報収集が一番な

んだろうが…」

「傭兵とはいえ4人埋めて1人尋問したし、城から脱出したときにも何人か倒してしまったから、さすがに帰国の列に加わるのは、ね…」

再会して騒がれたら面倒だ、最悪再び周囲が敵になりかねない。とりあえず親分が持っていた地図に視線を落とす。

「少し時間をずらしてシェルトリーに入りたい、となると」

「遠回りで目指すか、日にちをずらして向かうかだが、私達は傭兵達の向かう先を聞き忘れたような…」

「あゝってことは安全策ならデュゴスの隣町ステラにでも行って日常生活を学ぶ。傭兵達と再開するリスクを覚悟するならシェルトリーを目指す、の二つになるわけか」

（あゝ、この世界の常識を聞きだすことに夢中で第一歩に必要なことを聞き忘れるってのは、なんだかな〜）

まるで、なんでも最初から上手くはいかないものだ、という言葉の見本のようなだ。

当面の資金を稼ぐために、ひとまず《三大ギルド》を目指すつもりだったのだが

「しゃーねーか、安全策をとって隣町に行ってみよう、一般兵には負けない力があるといっても油断は出来ないからな」

「乗り物の確保は無理そうだね、早めに出て歩けるだけ歩いてみよう。地図の縮尺が分からないけど、もしかしたら今日中に着くかもしれない」

「そうと決まればシェルトリー軍について来た商店が、さっき開店準備していたから見に行ってみようぜ」

「そうだね、バッグや食料など買わなきゃいけない物は色々ありそうだ」

鍋を洗い、支度を整えフードを被って表へ出る

昨夜の宴では戦利品を持ち歩く輩も多かったため、服を束ねて持ち歩いていても余り注目をされずにすんだが今となってはそれも難しいだろう

早くも旅人が着た切り雀な理由を痛感しながら、替えの服などは外套の内側に隠すように持ち、商店が開かれている広場へと向かった。

「いらっしやい、早い者勝ちだから後から来ても売れないよ」

「水筒というか革袋か、バッグは——革で出来ちゃいるが学校で見た剣道の防具入りを彷彿とさせる形状だな」

「紐を引くことで口を閉めるタイプだね。材料を見る限りリュックやボストンバッグとかも作れそうだけど種類は無いみたいだ」

「確かにあってもおかしくないかもしれないけどさ、そういうボストンバッグってボストン大学の学生が愛用してたからそんな名前になったらしいぜ。こっちの世界にあるなら別の名前がついてるかもしれないねーな」

「名前の由来か：そういう言葉が日本語で聞こえるが、これはこの世界の人が日本語を使っているのか私達がそう聞こえるように最初に魔法を掛けられていたのか：どっちなのだろうな？」

「ん？あ、そうか！魔法じゃないなら、近年の日本と何らかのつながりが：いや、ないだろ。コシヌケーが言ってただろ言語と通貨は統一されているんだぜ、仮にも技術大国とか呼ばれる日本の言葉が世界中に浸透するほど長くかかわってるのに中世の技術レベルってチグハグ過ぎるだろ」

「なら魔法による翻訳という事になるな。そうなると私達にとって未知のモノはどう訳されるのだろう？翻訳は基本的に意味ではなく概念を訳してくれた方がありがたいのだが」

「えっと、物ではなくモノか？ごめん綾乃。俺の頭だとそろそろキツイ…」

「ああ、すまない。今後の生活にも関わってきそうな事だったからつい」

「えっと、つまりどういうことだ？」

「翻訳魔法はどうせなら直訳で訳されるより、伝えたい意思を重視して訳してくれるとありがたいね、という話だ」

「おきやくさくん、店先で話し込んでないで、買うの？買わないの？」

「ああ！買う買う！おっちゃん、この隣町のステラに行こうと思うんだけど、どのくらいかかるか知ってる？」

「ん？アンタ傭兵だろ、シェルトリーには戻らんのかい？」

「いや、せっかくこっちまで来たんだから少し見てまわろうかと思っただけさ」

「はくのん気だね。逃げ出したデュゴスの姫様がその町で見つかったりしたら戦争に巻き込まれかねないよ？」

「え！？お姫様逃げ逃げされたのか？」

「知らないのかい？王様と王妃様はお城で討たれたけど、姫様は親衛隊が防衛していた間に逃がされたらしい。その後親衛隊の隊員の多くも逃げ延びたんだとか、シェルトリーは金払いは良いけど兵の質だと劣るのかね。まあ、真っ先に調べられる街だろうからいくらなんでもそんなところには逃げないだろうけどね、あ！ステラまでの時間だったっけ？今から行けば夕方には着くんじゃないかい？」

「ってことは、水筒60×2+バッグはまだ一つでいいか、180！？+携帯食料は道に迷った分も考えて多く買っておきたいがなんか高い気がするな」

「所持金が少ないから最低限一日迷った分として4食でいいんじゃないか？」

「ってことは、乾燥肉10×4×2で、銅貨380枚…ちよつと

綾乃こっち来てくれ」

「ん？」

少し店から離れた所へ綾乃を呼んだ

「どうした？所持金は足りてたはずだが…」

「シー！確かに足りてるが、今は少しでも出費を抑えたい。これは分かるな？」

「ああ」

「じゃあフードとって笑顔で値切って来い、最低でも所持銅貨の枚数378だ」

「なっ！？」

あまりにも予想外の事を聞いたとでもいうように硬直する綾乃

「値切り交渉は、俺達の住んでいた時代でも安く買うためには必須スキルだ。確かにコンビニなどではきり出せないし応じてくれないだろうが、決して廃れたスキルではない！」

「ま、待ってくれ！キミは最近やっと愛想笑いが出来るようになった私に、やったことも無い値切り交渉を任せる気か！？」

「大丈夫だ！昨日の野盗も言っていただろ。綾乃は美人だ、笑顔で行けば銅貨2枚どころか20枚くらい問題じゃない！」

亮平の言葉の後、綾乃は顔を少し赤くして首を左右に激しく振る

「無理だ！出来るわけが無い！第一、私の愛想笑いで商人の目を欺けるとは思えない！」

「大丈夫だ、綾乃は美人だし！十分かわいい！お前に笑顔を向けられてクラッとこない男はいない！俺はそう確信している！」

「死ね」

「さ、殺害宣言！？ガアア、――――！！」

あまりの痛みに膝を着く亮平

考えてみれば手首を極められているだけなので死ぬはずは無いのに、
迸る殺気といいマジで死ぬかと思いました。

殺気を振り撒いたまま店に行き、叫び声以外は届かなかったものの
一部始終を見ていた店主がビクビクするなか、欲しいものを綾乃が
告げると心優しいおっちゃんは商品をバッグに詰めてカウンターに
置きタダで譲ってくれました。

「ア、アンタは美人だからタダでやるよ！え！？いやいや余っちゃま
ったら持って帰らなきゃナランからな！アハハハハ、ハハは……」

たぶん品物を差し出したりお金を受け取るときに手を出すことが怖
くなったんじゃないかと思えます。その証拠におっちゃん的笑顔は
引きつり手は前掛けを握り締めたまま細かく震えていました。

『手首固め』見た目は地味なものすごく痛いです。

第六話 無音の一撃（後書き）

”フラグブレイカー”それは無音の一撃

何か聞こえた気がすると言う方は、使わないであげてください。

綾乃さんはまだまだ意識的に笑顔を浮かべることが苦手な様子
そんな子がたまに見せる自然な笑顔って良いよね！

さて、次回は新ヒロイン登場か！？

第七話 いざ隣町ステラへ

結局無料^{タダ}で手に入れた道具を持って昨夜泊まった家に一度戻り
井戸水を釜戸で沸かして煮沸消毒をしている時に、気まづげに亮平
が口を開いた

「あゝ、その、すまん綾乃、ちょっと手段を選らばなすぎた。金を
残すことしか頭になくて、あ、でもお前をおだてて利用しようと考え
ていた訳でもなくて…」

「…分かってる。収入がゼロの間お金を節約したい気持ちはわか
るし、値段交渉も慣れておいて損の無いことだし！銅貨で支払って
身を軽くしようとしていたことも！私をか——」

そこまで言うのと、綾乃は顔をしかめて一度口を閉じ、胸に手を当て
てから話を続けた

「——私に言ったことは全て本心で、嘘をついている気配が無かつ
たのは分かっている。戦闘中のみとはいえアイコンタクトで会話で
きるのだ、そのくらいのことは理解しているつもりだ。キミなりに
今後のために思ってた行動だという事も、他意など無かったこ
とも」

「あ、おう…」

「——で、冷笑とは何だ？私がいっそんなものを浮かべた」

「あ、いや同じクラスのヤツが言ってたんだよ《氷の女王》の二つ
名はいつも冷たい笑みを浮かべながら不良をなぎ倒すことからつい
た名前だとか」

「私がそんなことをするはず無いだろ！そんなことはキミが一番よ
く知っているはずだ！」

「そりゃ、そうだけだよ…最近の綾乃のことはこの一ヶ月しか知ら

ないし：」

自分でも信じていないような弱い口調でいいわけじみたことを喋る亮平

おそらく「噂っておもしろーな」とか思ってた覚えていたことをふと思い出しポロっと口にしただけなのだろう。

（でも、いっしょに不良を蹴散らしたとき笑っていたと思うんだがなー、まあ噂に聞く冷たい笑みではなかったとは思うけど）

「誰――」

「情報元は公開できない、まあ噂としてはそんなのもあったというだけだよ」

肩をすくめるように答える亮平を、一度睨むと綾乃は無言で作業を進めた。

おそらく綾乃の頭にはその候補者の顔が浮かんでいるだろう、引越してきて一ヶ月の亮平の友人はまだ少ないのだ。彼の冥福を祈りながら亮平は作業を手伝う。

話しながらも作業を進めていたため、お湯を冷ましてから革袋に注いで水筒が完成し、

ついでに持ち運びによさそうな大きさの鍋を失敬して衣服と共にバッグに詰めた。

（うわー自業自得とはいえ無言は気まずい）

――トンッ

「……はあ、もう気にしないから。こっちに来て、私も少し冷静じゃなかったようだし」

「すまん」

「いいって言ってるんだ。私はそんなに引きずるような性格じゃない」

亮平の胸を叩き、そう言うのと拳の形にした片手を頭の高さにまで上げた。

「あらためて背中中は任せるゾ、相棒！」

片目を瞑って少し冗談めかした調子で言う綾乃に内心頭を下げながら、亮平も拳で答える

「おう！」

（とはいえ、さすがにこの借りはいつか返さんとな）

予定より出発が遅れたため、二人は心持足早にデュゴスの街を発った。

デュゴスの街から街道を歩き四時間、澄み渡るような青空の下どこまでも広がるような草原の中をつづきる街道を何事も無く歩く

「モンスターがいる世界だから、町の外は危険地帯かと思っていたけど何もいねーな？」

「コシヌケーの最後のセリフ、覚えているか？」

「んー、森の中はモンスターや亜人が怖い？」

「その前だ」

「戦争中で――あ、騒がしかったから今あの街の近くにモンスターがいないのか！」

「全てのモンスターがそうである訳ではないらしいが、無関係ではないのだろう」

「んじゃ、そろそろ出てくるかもしれねえな、まってるよスライム！」

「なにか思い入れのあるモンスターなのか？」

「ゲームの序盤と言ったら定番のモンスターだぜ、たぶん道具を使えない分、城で見かけたゴブリンよりは弱いはずだ」

「そのくらいなら数が出てこなければ何とかなるな」

「数が出てきたら厄介だぜ、場合によっては10匹が融合して大きくなって強くなるってパターンもあるからな」

「…それは、生き物なのか？」

そんな話をしながら歩いていると街道から外れた右手側、緩やかな丘の向こう側から何か音が聞こえる事に気がついた。

「お、噂をすれば早速出たか？」

「ん…まて、今何か聞こえなかったか？」

「え？」

「……悲鳴だ！」

「!？」

視線を交わすと意識を戦闘用に切り替え、二人は街道を外れ丘の上へと急いだ

「先に言っとくが、無理そうなら首根っこ引っ搦んででも逃げるかな」

それを聞いた綾乃の表情は葛藤で歪んでいたが否定の声は聞こえなかった。

二人で丘の上へとたどり着くと、一気に視界が開けた。

「野犬か！」

「…多い」

丘の下の方では白い少女一人が、20匹を超える野犬の群れの中で必死に杖を振るっている姿が見えた。

（いや、野犬に似ているだけであれもモンスターかもしれない）

「どうする？」

「助けたいッ」

綾乃は今すぐにでもとび出して行きそうな様子で即答する。

「全員無事で切り抜けるには、俺が彼らの言う亜人で有る事を隠せないぞ、それでもか」

話す間にも確実に手傷を負っていく少女を見ながら綾乃は葛藤に揺れる声を絞り出した

「頼む…！」

「はぁ、いいぜ。俺だって助けたくないわけじゃない」

綾乃はいいと言った瞬間に跳び出していった。

一歩遅れて亮平も走る。

『目覚めろ、鬼の血！』

丘の途中に荷物を置き捨て、二人は駆け下りる勢いのまま殴りこむ。

「悪いが殺さずなんて獣相手にゃ言ってらんねえ！全力で行くぞ！

——スウー——
『ガアアアア!』

叫ぶとすぐに咆哮を上げ、威圧感を伴った突風を叩きつける。

亮平の咆哮は距離があつたため、野犬や少女に届く頃には風になつてしまつたが

雄叫びに驚き、身を固くする少女と野犬の元へ衝撃波で吹き飛び加速した綾乃が一足先に飛び込む

「はっ!」

一息に駆け抜け、少女の近くの野犬に掌打を叩きつけてから、白い少女と背中合わせになる

「助太刀します、彼も味方なので身を守ることに集中してください
!」

「あ、ありがとうございます?」

白い少女が反射的に向けた視線の先には亜人の少年がいるのだろう。それでも了解は得られたと判断して、綾乃は目の前の野犬から身を守ることに集中する。

一方群れの輪の外、突然背後から咆哮を叩きつけられ包囲が乱れる中、鬼と化した亮平が拳を振るう

「オラァ!」

ゴッ——

骨の碎けるような嫌な手ごたえと共に、他を巻き込んで吹き飛ぶ野犬

「くそっ！犬も猫も好きな方なのによッ！」

眉をしかめながらも最低一撃で二匹巻き込むように殴りつける亮平

「可哀想だが、人に手を出したことを恨め！」

元の世界でも、基本人の肉の味を覚えた獣は殺さなくては不味い
そこで手を打たなければまた人を食らう可能性は高いし、最悪他の
ものにまで広まってしまう可能性もあるからだ。

亮平が一撃で二匹を戦闘不能にし、綾乃は殺せないまでも確実に行動不能にする、戦いは瞬く間に決着がついた。

「さて、面倒なことにならなきゃいいが」

そう言う亮平の視線の先には未だ警戒の表情を浮かべる白い少女がいた。

第七話 いざ隣町ステラへ（後書き）

さて、前回のあとがきのとおりそれっぽい人を出せました。

試行錯誤している間はやっぱり出せないかも？とか

ローパーになるかも？とか

えらく変化しそうでしたが何とか宣言どおりになりました。

前回フラグブレイカーを使ったのは、始まってまだ一日しかたっていないのにあの状況！数日カットする予定もあるし、移動時間も含まれば数ヶ月は冒険してもらう予定なのに、一日目からあんだけとばしまくるとか！あの調子で一ヶ月も書いたら作者が精神的に吐血するわ！

さて次回は多分隣町ステラに着く…と思います。

第八話 謎の少女

遠くから見たときは白いつぼい印象の少女としか見えなかったものの近くで見ると白く見えていたのは腰まで届きそうな、長い白銀の髪が戦鬨で広がって見えたから、らしい

きっと微笑めばやわらかい印象を与えるだろう顔は今は警戒の表情を浮かべ杖を握り締めている。

服装は、頭には何もつけていないように見えるが服は紺色の修道服のようだ。

と、そこまで考えて視線が止まった。

（大きい!?）

ゆったりした服のせいではっきりとした事は分からないが、明らかにクラスメイトの女子達より大きい。

（馬鹿な！昨日に引き続き今日も前代未聞の光景が現れるとでも言うのか!?）

もしかしたら雑誌でなら見たことがあるかもしれないが、実際に目にするのは初めてだ。

亮平がそんな煩惱まみれの驚愕に震えていると、いつの間にか隣にいた綾乃がジト目を向けている事によりやく気がついた。

動揺に心臓が暴れだす中、慌てて意識を切り替えて現状の打開策を考える。

（おっばい、おっばい。っていい加減に落ち着けえー！ー！ー！オレ！ぜえーはーっ、あゝおそらく亜人に見える俺を警戒しているはずだから、ひとまず俺が離れて綾乃に話をしてもらうか？）

と、そこまで考えてから前方の少女の視線に気がついた。

（綾乃に対しても警戒している？ちょっと待て、どういうことだ？）

綾乃は口調こそ男っぽいかもしれないが、姿を見てまで男と誤解するやつはいない。

ひとまず助けてくれた同姓を見るにしては視線が厳しい気がする。そこまで考えてからチラッと綾乃を見て気がついた。

「あ、綾乃、俺達ペアルックだ」

「だ、誰がペア——あ！？」

言われて綾乃も気がついたらしい、今自分達が野盗にしか見えないボロボロの傭兵の服を着ているということにあわてて白銀の髪の少女に向かい弁明をする綾乃

「ち、違うぞ！この服は着るものが無かったから野盗から奪ったもので…」

「その言い方だと最悪、野盗を襲った野盗に聞こえるな」

「ええっ！？」

いきなり漫才を始めた野盗っぽい二人組みをポカンとした顔で見る白銀の髪の少女

その意識の隙を突いて鬼化を解除して話しかける。

「とりあえず、俺らに敵対の意思は無い。野盗に見えるかもしれないがこれは事情があってね、今の俺達はステラという町でギルドへの入会を希望しているただの旅人だ」

そう言いながら両手を上に挙げ、敵意の無いことを示す亮平
それを見ていた少女は気の抜けた表情のまま倒れこんだ。

「うお！？ 大丈夫か？」

驚いて声を掛ける亮平を追い越し、すばやく駆け寄った綾乃が脈を
確かめ傷の具合を見る

綾乃は古武術をやっているおかげで簡単な診断と応急処置の知識な
らあるのだ。

「どうだ？」

「脈はあるが気を失ってるな、やはり野犬につけられた傷口が心配
だ。早めに消毒して止血したいが…」

「っ消毒薬もアルコールもねえか！」

酒が残っていたかどうかは怪しいが、探すぐらいはするべきだった。
商人のおっちゃんが言っていたことが確かなら、ここはそろそろ街
と町の中間辺りになっているはずだ
せっかく助けた人間を見殺しになどしたくない。

「綾乃、この飲み水で傷口を洗ってやれ。秘伝の傷薬は今も持って
るよな？」

「ああ、だがそれだけでは不安があるが…」

「終わったら止血して背中に乗れ、俺が鬼化して町の近くまで抱え
て走る」

「いくら鬼化したとしても体力が無限にあるわけじゃないだろ！徒
歩で残り四時間前後の距離をそんな状態で走る気か？既にここまで
だってロクな休憩をとらずに歩いてきたんだぞ？」

「力尽きたらそんな時はそんな時だ、残りの距離をお前に頼んで俺は後
からトランシーバーで連絡を取りながら向かうさ」

「…急ぐのはいいけど、なるべく揺らさないように。あと町が見えたらすぐに鬼化を解いて、約束できる?」

この世界の住人は亜人に対する恐怖が強い、そのため人間の町を旅する亜人は皆無らしい。

それが現れたとき住民がどんな行動をとるか：体験したいとは思えない。

やる事を決めると亮平は背を向け鬼化してから周囲を警戒、綾乃は少女の服を脱がせて傷の見落としが無いかチェックしながら傷口を洗い薬を塗って止血していく

血の臭いに誘われたのか草原の中、高い草の下、岩の影などに新たな敵の姿が見え隠れする。

「ハッ！さっきまでの何事も無かった四時間が嘘みてえじゃねえか！」

獰猛な笑みを浮かべ、少し二人とは距離をとるように前に出る

「来てみやがれ！今なら鬼の本能の赴くまま叩き潰してやる！」

叫ぶや否や、今までよりも大きく息を吸う

スウウー——

『ガアアア——！！』

戦意を漲らせ、広域へ聞こえるように咆哮をあげる
すると、ほとんどの影が躊躇し動きを止める中、他より体の大きい
一頭だけが進み出てきた。

「なんだ？ テメエがこの辺のボスか？」

こちらにきてからよく使うようになった《咆哮》

妖怪狩りの時は場所が現代の住宅地だったため、夜中にそんな声を上げるわけにもいかず、使うことはほとんど無かったが、使ってみれば様々な効果の有る使い勝手の良い技だということが分かった。大声と衝撃波で気の弱いもの、自分より弱いものを怯ませる事ができ、至近距離の衝撃波は周囲を囲むものを薙ぎ払う事が出来る。近くにいる味方も吹き飛ばしてしまうのが欠点だが、それは先ほど綾乃を加速させたように利点にもなる。

（他に欠点があるとすれば、攻撃力はほぼ皆無ということと、何度も使うとのどがかれそうってトコか）

進み出てきたのは先ほどまで戦っていた野犬より遥かに大きな固体だ。灰色の毛並みの中所々に赤黒い毛並みがあり、この大きさだと犬というよりは狼にしか見えない

「んゝ俺のファンタジー知識には無い姿だな…」

「グルルルル」

睨み合いの中、先に動いたのは狼の方だった

後方に流れるようだった毛並みが、体から離れるように少し持ち上がることで一回り大きくなると同時に、見る間に毛色が明るくなっていく

「グウウウ…」

そんな鳴き声と共に狼の目の前に3cmほどの火の玉五つが風によ

って集まるが如く、火の粉を揺らめかせながら線を描き、一箇所
70cmほどの球形を描き、回る
その姿はさながら幼い頃に見た朱線の入ったスパイラルという名の
ビー玉に似ていた。

時ならぬ芸術を見た様な心持であっけにとられていたが、これは相
手の攻撃魔法。
すぐにそれを思い知ることになった。

「ガァ！」

「——チッ!？」

狼の声と共に一直線に飛んできた炎弾を避けようと体が動こうとす
るが背後には綾乃たちがいる

「くそっ！」

仕方なく、飛んできた炎弾を左の拳でぶん殴った。

城壁を壊したときの様に手に青黒い炎を灯せば違った結果にな
ったかもしれないが、結果的に亮平は連続する爆発と共に拳と腕を
浅く切り刻まれた上火傷を負った。

「ぐッ！」

（っ——火傷のおかげで失血が少ないことがせめてもの救いか？）

しかし傷の具合を見てる暇など無かった、爆発に視界を遮られてい
るうちに狼が接近していたのだ。

「っ!？」

（だけど接近戦ならこっちにも分が——）

思考しながらも迎撃のために右の拳を振りかぶった時、狼の体にも変化が起きる

もはや紅く見える毛並みからは火の粉が舞い上がり狼の体を覆っていく

「マジ!？」

(炎を纏っての体当たりとかいう、魔法的なアレかよ!?)

後方を防衛するためとは言え知識の無さも有り後手後手になってしまふ

それでも亮平は引き下がるわけには行かない

おそらくこの時が過去最速で精神集中を成した時だろう

超大型犬を更に上回る大きさで炎を纏った狼に対し、亮平は青黒き炎を纏った拳を打ち出した!

第八話 謎の少女（後書き）

続きます。

っていうかステラの町に着かなかった！？
むむむ、到着予定だったはずなのに
狼さんアンタ呼んでないよ！

第九話 炎狼

空は青く澄み渡り、太陽は頂点を過ぎて少し傾いている
30分ほど前まで静かだった草原には、今は戦いの音が響く

「はああああー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「グルウウウアアー！ー！ー！ー！ー！」

鬼化した亮平が繰り出す青黒い炎を纏う拳と、炎を纏う狼の体当たりがぶつかり合い爆音が響く

「おおおおおおお！？」

ゴロゴロゴロゴロツ

狼の脳天めがけて拳を繰り出したが、当たると同時に爆発し双方共にぶっ飛ばされた。

「ちょ、綾乃アレ無理そう。その子連れて街道まで戻ってくれ」

地面を転がってる最中に肌色が見えた気がしたがそれが何なのかまでは分からなかった

くそっ、俺にもっと動体視力があれば！とか普段なら思うところだが、今はマジで不味い

双方共に吹っ飛ばされたはずが、綾乃に話しかけながら体勢を戻すと、さっき受けた《風を伴う炎弾》が一つ二つと作られていく最中だった。

（体勢の立て直しも早い！遠距離攻撃の無い俺にこの距離は不利だ）

かといって前に出た時、回りこむようにカーブを描いて彼女達を狙われたら下手をすれば致命傷を受けかねない

「クソッ、今は我慢の一手かよ！」

荒々しくなる心を静めるため、大きく息を吐き改めて意識を切り替える。子供ガキの頃、山背道場で学び日課として繰り返ししてきた呼吸法を繰り返し意識を体の隅々まで広げる。

その状態で呼吸の流れに同期する様な力の流れをイメージ、両手に意識を集中すると青黒い炎が灯った。

（やっぱり、基本はこれでいいんだ）

ただ、この炎を外に出すと思うと上手くいかない
試しに一度掌の上に浮く火の玉をイメージしてみたが成功しなかった。

綾乃たちと一定の距離をあけたまま亮平たちはじりじりと後退して行く。

亮平が試行錯誤しながら狼と退治している時、その後方では手当てを終えた綾乃が狼を警戒しながら少女を抱き上げて後方へと進んでいた。

「う…わたしは——なに…」

不明瞭な言葉と共に白銀の髪の少女の目が開き、ぼんやりとした視線を空へと向けた。

「気がついたか？私の名前は綾乃、あなたの名前は？」

「わたし？わたしは——ふいーりあ」

「わかった。ふいーりあ、あなたの怪我で一番深いのは右腕を噛まれた傷だ。正直手持ちの薬では心もとない、後で必ず近くの町まで送るからひとまずこの丘の先にある街道へ避難していてくれないか？」

街道には特殊な石が等間隔に配置されていて、その効果によりモンスターが寄り付きにくいようになっている。

もっともこれは万能ではないらしいのだが、現状では一番の安全地帯だろう。

「ひなん？なにが——痛っ!？」

不用意に体を動かしてしまい全身の傷がいつせいに悲鳴を上げたそれがぼんやりしていたフイーリアの意識を覚醒させる事になった。

「ここは？——あ、あなたは!？は、離してください!」

先程まで警戒し睨み合っていた人物が至近距離にいることを認め、暴れるフイーリア

だが今はそんな感情の動きにまで構ってはいられない

本当は街道まで付き添っていくつもりだったが、今の彼女の感情を考えると逆効果になりかねない。フイーリアを下ろすと有無を言わせぬ口調で言う

「行って!そこを越えれば街道があるから、早く!」

怪我の痛みを感じながらも、暴れる力があるのならばひとまずは大

丈夫だろうと判断した綾乃は、逃げるように指示した後亮平の許へ向かった。

先程の2発の《風を伴う炎弾》は青黒き炎を纏う拳により破壊され改めて亮平と狼のにらみ合いが続く中、《炎弾》の数は新たに5つにまで増えていた。

壁役としてこの場を動くことの出来ない亮平は、静かに敵を観察する

（若干だが一回目より作り出す速度が遅い気がする。頭への攻撃が効果があったと思えてえが、複数作ったことによる弊害かもしれないし）

「亮平！彼女の方はひとまず大丈夫そうだ。倒すにせよ逃げるにせよ私が一撃をいれた方がいいだろう？」

「そうだな。はぁ〜、こっちは丸焼きになるまで待たされるのかと冷や冷やしてたぜ」

「すまない、だがこれで…」

「ああ！反撃開始だ！」

そう言うときアイコンタクトを交わした二人は6つ目の《風を伴う炎弾》の作製に入っている狼に向かって走り出す。

狼は作りかけの魔法を中断すると5つの炎弾を二人に向かって時間差をつけて撃ちだしてきた

それに対してこちらのやることは単純だ、両拳に青黒い炎を灯した亮平を先頭にして駆け抜ける。

”缶蹴り”のちょっと卑怯な必勝法と同じ、前のヤツを犠牲に後に続くものが敵の懷までたどり着くという力技。ひょっとしたら数は力ということを最初に知る遊びかもしれない。

飛んで来た《風を伴う炎弾》に対し、3つまでは両の拳で打ち砕いたが4つ目以降は間に合わなかった

全身で2発の直撃を受けた亮平に、炎を纏った狼の体当たりが迫る。それに対し亮平は、姿勢を崩されないよう踏ん張り、腕によるガードさえ捨てて用意していた一撃を繰り出す

突撃してきた狼に対し、青黒い炎を灯した両手を組み合わせ、大上段から振り下ろす！

「真正面からが互角なら、ずらした角度からの一撃ならどうだ！」

再びの爆発に大きく体勢を崩されながらも、勝利を確信した亮平は笑みを浮かべる

（後は頼んだぜ！）

亮平の後ろを影の如く付いて来た綾乃は、地面に叩きつけられ炎を霧散させる狼に必殺の一撃を叩き込んだ。

「大丈夫か！？亮平！」

「おゝ、何とかな。っ痛ててて、はあ、ま、これ位で済んで良かったよ。さすがこの体は丈夫に出来てる」

顔をしかめながら身を起こす亮平の服は切り裂かれ、もはやボロ布と言うのが相応しい有り様だ

綾乃は起き上がるのを手伝おうと手を差し伸べながら状態を確認する

「傷そのものは浅い様だが、火傷といい服の裂かれ具合といい見た

目は酷いな――!？」

「ああ、ま、しばらく鬼のままでもいいれば傷は治るだろ!？」

綾乃が差し出してくれた手を掴み、立ち上がろうとしたところで手を振り払われた

全くの想定外だった亮平は目を丸くしながら尻餅をつく

「え?ど、どうした?」

「はえ?ナ、ナンデモナイデス」

顔を真っ赤にしながら腰の引けた状態で再び手を差し伸べてくる綾乃

(いや、行動が不審すぎるだろ)

あらためて自身の全身を見ると、切り裂かれた隙間から見えていた。

それそのものは無事だったが、周囲まで無事などという漫画的奇跡は起こらなかったようだ

切られなかった事に安堵しつつも、今安堵するような状況ではないことを思い出し顔が引きつる

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「:見なかった方向でお願いシマス」

そんな亮平の言葉に赤い顔の綾乃は顔を伏せるように頷いた
午前中とはまた違った気まずさを感じながらも、ボロボロになった上の服を使いひとまずの体裁を整える。

そんなこんなでギクシャクとしながら立ち上がったとき、丘の上にいる少女の声が聞こえてきた

「急いで！そこを離れてください、早くしないとその子の親が来てしまいます！」

「…子？」

「…親」

「…なあ綾乃、俺は今とても嫌な予感がしているんだが」

「…奇遇だな、私もだ」

引きつった顔の亮平と、こわばった顔の綾乃は視線を合わせると、どちらとも無く丘へ向かって走り始めた
気絶している狼がすぐに目覚めないことを祈りながら。

丘の上で待っていたフィーリアと合流後も走り続け、街道をステラへと突き進む

途中で気がついたのだがボロボロだったフィーリアの傷は、この短時間でかなり治っているようだった

フィーリアがペースについていけなくなるまで走り続けてから、戦いの場を遠くに見ながらひとまずの休憩になった。

「えーと、とりあえず生きてて良かった。俺の名前は武宮亮平、亮平と呼んでくれ」

「私も改めて名乗っておこうか、山城綾乃だ綾乃でいい」

「あ、はいリョウヘイ様とアヤノ様ですね。危ないところを助けていただいてありがとうございます。私はフィーリアと申します、フィーとお呼び下さい」

「早速で悪いけど傷は大丈夫なのか？」

「はい、右腕はまだ途中ですが。私は治癒術が使えるので…あ、あ

の、リヨウヘイ様の傷の方が酷いようですし癒して差し上げたいのですが…」

どうやら誤解も解けたようで、彼女から見れば亜人であるはずの亮平の身も案じてくれた。

「お、そりゃ助かる。回復魔法かくどんな感じなんだろうな」

「えっと、私は神官であって魔法使いではないのですが…」

「どう違うのだ？」

「魔法使いは大気に満ちるマナというものを使い術を行使するらしいのですが、神官は神の僕となり神より与えられた力で奇跡を成すのです」

「分かったような、分からないような…」

「すみません。私は神官なので魔法使いの事には詳しくないのですが、神に与えられた力に関してならもう少し説明も出来るのですが…」

「あゝ、片方だけじゃ違いなんか分からんか。まあいいやとにかくやってみてくれ、回復——じゃなくて治癒術は初体験なんだ、どんなもんか見てみたい」

「わかりました。『神よ、彼の者に癒しの光を…』」

フィーリアは亮平の隣に立つと手を傷に向けながら祈るように言葉を紡ぐ

手から出た暖かな光が傷へと伸びる

「おゝ暖かい光が…ん？なんかパチパチする…いたっ！痛い！？いたたたた」

「え？え？そ、そんなはずは…」

フィーリアは狼狽して術を中止した

「な、なんで？痛みなんて起こるはず無いのに…」

試しに自分の腕に再び治癒術をかけるフィーリア

「痛くない…治癒術の失敗じゃ…ない？」

フィーリアの目が鬼化したままの亮平の額に生えた角を見つめる
フィーリアは先程まで亜人に対する特別な感情を見せなかったが、
世間一般が見せる亜人への感情を知らぬわけではないだろう
ひそかに表情を硬くする綾乃には気付かず、呆然とした面持ちで言
葉を紡ぐ

「神の癒しが効かない？——いえ、効かないどころか痛みを伴う…
神の力が相手を傷つける——神の…敵？」

フィーリアは呆然とした表情のまま戸惑う亮平の両頬に手を添えて
更に近づきじっと見つめる

「…あなたが敵？——そんなはずない、こんな優しい目をした人が
そんなはずない！」

「え？いや、最近目つきが悪いとか言われてんだけど…」

なんとなく反論してしまう亮平の言葉を無視して続ける

「リョウヘイ様、私と共に総本山へ行ってください！」

「え、ええっ!？」

「神に直接尋ねてみましょう、こんなおかしいです！」

「え、ちよっ、俺が言うのもなんだけど信仰とかそういう系統の人が
そんな簡単に疑問もって良いの？ってか大丈夫なのか!？」

「良いんです！ウチの神様は女の子に甘いんです！」

「別の意味で大丈夫か!？」

なんだかよくわからなくなりつつある問答をしていると遠くから遠吠えが聞こえてきた。

その声に3人ともはっとなり先程までいた方向をうかがう

「成体の大きさを見れば一目であなた方が戦っていたのが炎狼の子供だとわかると思いますが、今の子を傷つけられた親に近づくのは自殺行為でしょう。個体のクラスは一中級とはいえ群れで活動するため、その脅威は上級のモンスターに匹敵するといえます…」

「あ、アレより強いやつが群れでって…」

「はい…商隊などが空腹の炎狼に遭遇すれば護衛ごと壊滅は免れない、そのことから付いた名前が『平原の悪夢』——」

ゾッ——

その言葉を聞くと同時に亮平の背筋が凍りついたかのように強い冷気を感じた

(変だ…)

語られる内容は確かに恐ろしげだが、商隊の壊滅など経験したことのない自分がこんなにも恐怖を感じるのはおかしい
見れば綾乃も顔を青ざめさせている
なんともなくもと来た方に視線を向ける

「——視られてる!？」

何らかの力によるものなのか、純粹に狼の嗅覚の成せる技か、こちらを窺がう強大な気配を感じた

敵の姿さえ見えないのに、感じる強烈な圧力によりはつきりと理解させられる
勝てないと

「冗談じゃねえ!!」

男として敵の姿さえ見ないまま逃げ出すことに抵抗感を覚えないわけではないが
そんなもののために彼女達を危険にさらす気など亮平にはひとかけらもない
すぐさま両脇に彼女達を抱えると、鬼の力を使い全力を振り絞ってステラの町に向かい駆け出した。

第九話 炎狼（後書き）

走ってばかりですな主人公

平和な日本にちよつとした非日常が加わった程度のぬるい世界から来たので仕方ないのです。

基本的な強さを書いておきますか

一対一なら

ザコモンスターⅡ村人<一般兵Ⅱ傭兵<騎士Ⅱ強者Ⅱ下級モンスターⅠ<国で10指に入る達人Ⅱ中級モンスター<上級モンスターⅠ
多少の差異はあるものの基本はこんな感じですよ。

やつとステラへ到着します。

え？ステラって何かって？隣町ですよ隣町

第十話 ステラ到着

圧力が消えた後もしばらくの間街道を走り続けたがどうやら追いかけてくる気はないようだ

「ゼーはー、昨日から走る機会が多すぎやしねえか？」

まだ昼食をとっていなかったので一度休憩することにした話を聞くとフィーリアも同じ町を目指していたらしいので一緒に行くことに

最初フィーリアは気がかりなことでもあるのか、もと来た道を眺めていたが

声を掛けると寂しげに笑って首を横に振り、以降振り返ることはなかった。

表情にこそ出さなかったが何かあったのだろうどことなく暗い雰囲気を変えるため治癒術について尋ねてみると、彼女は柔らかな笑みを浮かべて答えてくれた

？ 治癒術を使うには神の僕とやらなくてはならない

？ 『神よ、彼の者に癒しの光を…』等の言葉により始まり、それは術者が祈り続ける限り癒しの効果は持続する

？ 浅い傷や、止血をするだけならかなり早く治せるが、酷い傷を一瞬にして治すことはできない

？ 死者の復活は不可能

という事がわかった。

魔法があることから期待してなかったと言えば嘘になるかもしれないが、やはり死者の復活は無理らしい

神官は神によって不可能だと云われているし、魔法使いも成し遂げ

たものはおらず、試行錯誤により多くの悲劇を繰り返してきたことから研究そのものを禁止しているという話だ

「禁止って誰がしてるんだ？やっぱり神様？」

「いえ、神は禁じてなどいません。ただ、「一つ一つの命の重みを、忘れないで下さい」とだけ仰ったそうです。∴研究の禁止をしているのは魔術師ギルドです」

「魔術師ギルドというのは《三大ギルド》の一つの？」

「はい、冒険者ギルド、傭兵ギルド、魔術師ギルドからなる《三大ギルド》のうちの一つです。ですが∴今はこの三大ギルドという名前に違和感を覚える人が多いそうです」

「ん、どゆこと？」

「冒険者ギルドなどといっても皆亜人やモンスターを恐れて街道から遠くへなど行きませんし、魔術師ギルドはいつの頃からか神秘を扱うものだからといって、貴族の紹介状がなければ入ることもできなくなってしまうて∴。傭兵ギルドは昨今どこでも戦の準備に明け暮れているため、一儲けできると希望者が殺到。実質傭兵ギルド以外は閑古鳥が鳴いているのが現状という話です。」

「なるほど、一極集中しているのに何が三大かってか？」

「はい、お二人はお強いようですし、お金を稼ぎたいのなら傭兵ギルドが一番いいらしいですよ？」

「うん、まあお金は稼げるに越したことはないけど∴話は変わるが、ちょっと前からフィーリアは俺を恐れているようには見えないがどうしてなんだ？」

「つーん、ちゃんと呼んでください」

「は？」

「フィーリアではなくフィーと呼んでくださいと言いました」

そんなことを言いながらフィーリアは頬を膨らませる。容姿といい穏やかな雰囲気といい一見年上の女性に見えるのだが、時折むきに

なると途端に幼げな言動をし始める

彼女を見ていると年上なのか年下なのか迷ってしまう、まあ容姿からして年下なんてことはありえないとは思うが：

「えっと、フィー？」

「はい♪」

まるで大輪の花のような笑顔を向けてくるフィーリア

「えっと、そ、それで俺を恐がらない理由は？」

「助けていただきましたし、お顔もしっかりと拝見いたしました。恐がる理由なんて私にはありません」

幼いかと思えば世論に流される事のない自己の基準を持っている
亮平にとって今まで周囲にいなかったタイプだけに少々戸惑いを覚える相手だ

なんとなく助けを求めるような気分で綾乃の方を向くと、乾燥肉を鍋で煮てもどしている最中だった

「ん、そろそろいいだろ。：しかしこの乾燥肉というのは石のように硬いな、あまりに硬いから表面にナイフで傷をつけて煮てみたのだが：どうかな？ っと」

ちなみにナイフや火打石などは泊まった家にあつたものを持ってく中で一番大きな鍋の中につっこんで来た。あの家の人には悪いことをしたな〜とちよつと罪悪感にかられる亮平

「よし、完成だ。今日はゲストがいるから亮平が大鍋を使ってくれ」

三つの大きさの違う金属の器の内、煮汁に戻し乾燥肉が浮かぶ

「…なあ、綾乃。俺今初めて心の底から帰りたいって思ったよ…」
「…言うな、涙がこぼれそうになるじゃないか」

あまりにわびしい食事風景にテンションだだ下りの二人
その様子を見て慌てたのはフィーリアだ

「お、お二人ともどうしたんですか？ご馳走になる私が言うのはおかしいのかもしれませんが、元氣を出してください。暗い顔で食べると消化にもよくありませんよ？」

ちなみにフィーリアは着の身着のまま杖だけもって街道の外れをさ迷っていたらしい、よく死ななかったものだ。

亮平と綾乃は当たり前のように帰還を目指してはいたが、心のどこかではこの未知の世界を見てみたいという思いも少しはあったのだ
初日からいいイメージを持てない状況ではあったが、先程の炎狼が見せた魔法は攻撃でありながら一つの芸術のように目に焼きついて
いた

とはいえ、人間美味しい物を食べたいというのはなかなか捨てきれない欲求だ

しかも次にいつ食べられるかわからず、しばらくは味も素っ気もないものを食べることが多くなりそうだと思うと、さすがに暗くもなる
昨夜と今朝は質素ながらも、それなりに種類のある珍しい異世界の料理を食べたが

しかし今はコレである

しかもコレが旅人が日常的に食べる保存食なのだ。もとよりこの世界に長居する気はなかったが、危ない橋を渡るとしても限度があるため、多少遠回りでも安全策をとって帰る方法を探すつもりだった
亮平としては何かしらの改善案を考えたくなるのは仕方ないことだ
と思う。

「綾乃、さすがにコレばかりじゃ気分が暗くなる。肉はコレでしばらく我慢するとしても他になんか作れねえかな？」

「保存食か：日本では缶詰、干物、固いパンやビスケット、後はレトルトとかも含まれるか？」

「現状との差が大きすぎてレトルトが含まれることに違和感を覚えるな：それが有りならカップ麺もか、だけど作る手間を考えるとなく。実現可能なやつだけを考えようぜ」

ついついいつもの調子で話していた二人にフィーリアが声を掛けた

「お二人の故郷にはそんなにたくさん保存食があるのですか？：きつと、とても寒い地方なのでしょうね」

「え？あ、うん」

「では、この辺りのことでわからないことがあったらなんでも聞いてくださいね。お力になれるかと思います」

「あ、ありがとう助かるよ」

（元の世界と繋がるような不用意な発言はしないほうがいいかな。保存食の事は後で考えればいいだろ）

「それじゃあお言葉に甘えて、教えてもらおうかな。まずは…」

気温や天気の話に始まり当たり障りのなさそうなことを話しながら、穏やかに昼食の時間は過ぎていった。

そして夕暮れ時

「ついたぞー！ステラの町！」

あ後は適度に休憩を挟みながら歩き、ほぼ予定どおりの時刻に到着することが出来たし

ステラの町が見えてきた頃には亮平の怪我也軽傷というくらいに自然回復していた。

ステラの町は領主の館を中心に広がる町で平原の真っ只中にあつた大きさは当然デュゴスの街に劣るが、むこうの街では見なかったこの世界の日常風景を見ることができる

ただし今は、町中を歩くオリーブ色の鎧を着ている兵士が現れると恐れるように早足に通り過ぎていくようだが：

（城で見かけた騎士より随分と軽装だな）

おそらくデュゴスの姫搜索のために身軽な兵士を派遣したのだろう

「おい、その銀髪の女。ちょっと止まれ」

門をくぐるとすぐにオリーブ色の鎧――シェルトリー軍の兵士3人組に呼び止められた

「我々は今、とある銀髪の女を探している。貴様はどこから来た？」

観察するような視線の兵士に対し、フィーリアは落ち着いた声で返答する

「昨日この町から出て南方の農村へ向かったのですが、途中でモンスターに襲われ必死に逃げ回っていると西の街道に出まして、そこを通りかかったこの方々に救われたのです」

フィーリアの言葉を吟味していた兵士の目が亮平と綾乃に向けられるが、格好といい顔立ちといい今は無関係だと判断したのだろう、すぐに視線を戻した。

「そうか、それは大変だったな。よし、我らが教会まで送り届けよう、戦争が終わったばかりで治安が悪化しているからな」

「え？」

係わり合いになりたくなかったのだろう、腕をつかまれたフィーリアは小さく動揺した。

この世界の教会は一国並みに力を持つ組織で各国に支部が存在する。戦時中とはいえ信者に無体なまねをすれば教会を敵に回すも等しい行為であるため、上官に慎重すぎるほどの対応を言い渡されているはずなのだ。

「基本的に教会のものには関わるな」と

教会と敵対してでも王女を探す方針なのか、この兵士の独断専行なのかは知らないがフィーリアにとって愉快な現状ではないようだ。視線を亮平に向けて兵士が口を開く

「貴様らも教会のものを保護してくれたこと、私からも礼を言おう。少ないがその善行に対する褒賞を与える」

そう言うのと左側にいた兵士に革で出来た小さな巾着袋のようなものを用意させる、小さいがあれも財布なのだろう

（はあ、マジでメンドウな事になったな。育ちが良さそうだったから貴族の出かもとは思ってたけど、お姫様が銀髪となると彼女である可能性がでてくる）

遠巻きにこちらを見る人々から、「またか…」という呟きが聞こえる

（片っ端から銀髪の娘を集めてんのか？だとしたら捕らえる根拠は薄そうだが……って助ける気かよ俺、いくらなんでもリスクが高すぎるだろう）

懊悩する亮平の頭に数時間前草原で思った事がよみがえる

（せっかく助けた人間を見殺しには——か）

その事を思い出したとき、亮平は兵士が差し出してきた革の袋を横にどけていた

「……何の真似だ？」

「悪いが、褒賞なら他のものを貰うつもりなんでね」

「他のもの、だと？」

「ああ、そのお嬢さんにこの町を案内してもらおう約束なんだ。その手を離してくれないかな？」

「貴様、現状を理解してないのか？今我々に逆らうことがどういう事になるかもわからぬ阿呆なのか？」

平和な日本に住んでいたとはいえ、戦勝直後に国の兵士に逆らうのがどれだけ危険か想像できぬ訳ではないが、男が一度決めた事を自分^{自分}に負けてひるがえす事ほどカッコ悪いこともないと思うのだ。

一瞬綾乃を見ると小さく笑みを返してきやがった、危ない橋渡るつてのに笑うんじゃねえよ

ちなみに案内うんぬんはでまかせだ

「あんたらこそ戦後のどさくさとはいえ、無理矢理教会の人間を連れてくつてのは不味かぁねーか？」

「彼女は我々が送り届けると言っているんだ」

「だったら、約束をした俺らが送り届けたって良いよな？」

言葉と共にフィーリアに顔を向けると、驚いた表情だったが頷いてくれた

「ほら、同意も取れた。今無理矢理事を運ぼうとしてるのはあんたの方だぜ」

亮平の言葉に感情を殺して受け答えしていた兵士の視線が鋭くなる

「貴様らのような身なりの者を信用などできるわけがなからう」

「あいたー、そりゃ今の俺らはボロボロの服だしな。だけど今信用されてんのはモンスターから助けた俺らのほうだぜ？」

正規兵が野盗のようなものより信用ならないという挑発さすがにこの言葉は相手の怒りを買ったようだ。

「いいだろう。そんなに死にたいなら殺してやる」

腰に下げた剣を抜き放つ兵士

「おー怖っ、こんな身なりの人間に口で負けたからって、相手は武器も持っていないってのに剣を抜くってえのは教養ある城の兵士様としてどうなんですかねえ」

普段使わないような口調も用いてことさら挑発するように言葉を並べる

余裕ぶってはいいるが鬼化してない亮平は単なる高校生の不良とそう変わらない実力しかない

人のままで剣で斬られれば死ぬだろう

（むぎむぎ殺られる気はねえが鬼の状態は手加減が難しいからな、人間相手に、しかもこんな場所で使いたかねえんだが…）

最悪の場合はためらう気はないが、使えば今後にかなりの悪影響が出る

リスクばかりでかくて嫌になる、そのうえフィーリアが姫でさえなければ彼女自身に危険は低いはずなのだ

もっとも普通に人身売買が行なわれていることを知ってしまったため確証は持てない、そうになるとフィーリアが嫌がっている限り庇う他ない

兵士二人が抜剣すると、俺たちを遠巻きにしていた輪は距離をとって大きくなった

もう一人の兵士は仲間を止めようか自分も参加するべきかと迷っているようだったため仲間にフィーリアを押し付けられていた。

2対2の状況だが決して互角ではない、緊張を表に出さないよう注意しながら対峙していると目の前の兵士が急にニタニタ笑いながら口を開いた

「では治安を乱しそうな不穏分子を発見したため処罰した、という方向で行こうか」

まるで自分が法だとしても言わんばかりのセリフに周囲の人垣が息を呑む

（うわー、なんだかコイツの独断専行のような気がしてきた）

昨日の戦と、その勝利による高揚が未だに去っていないのか、元々こんな性格なのかは知らないが嫌な相手に当たったようだ。

第十話 ステラ到着（後書き）

稚拙な文章ですみません

と、即行で謝罪したくなる気分には陥ってますw

私自身がL v U Pしたあかつきには、力不足で書ききれなかった部分を足してリニユアルしたいですね

特にタイトルの異世界冒険鬼（仮）

やっと到着したもののトラブルは絶えません

そろそろバトルは一度置いておきたいですが、どうなるかな？

第十一話 足りぬ力

空は茜色に染まり、その光は町の光景も昼間とはまた違う風景へと変えていく

ステラの町西門近くには、夕餉の仕度の時刻であるにもかかわらず人だかりができていた

騒ぎは6名の男女を中心として円を作っている

「それでは不穏分子の討伐を始める！」

その言葉と共に動き出した兵士を見て人垣から悲鳴が上がり、巻き込まれないよう逃げるもの、改めて距離をとり見物するものに分かれる

中央で喋っていた兵士Aは真っ直ぐ亮平のへと向かう
それに付き従っていた兵士Bへは綾乃が向かった
この行動に兵士Bは驚いたようだ。

「娘！後ろで震えていれば怪我せずに済むものを！」
「・・・」

その姿を見た亮平は兵士Aとの戦闘に巻き込まぬよう少し距離をとる

兵士Bへと向かった綾乃は速度を緩めると、無造作に剣の間合いへと踏み込む

その瞬間兵士Bの剣がなぎ払われるが綾乃はこれを後ろへ大きめに回避

間をおかずに接近すると兵士Bは剣を両手で持ち上段から振り下ろ

す！

兵士Aに狙われた亮平は、ひたすら避け続ける

ただ逃げるのではなく、念のためフィーリアを視界に収め離れすぎないという制限付きでだ

この騒ぎの隙に連れて行かれては意味がない

「チッ、ちよこまかと！」

「・・・つく」

はつきり言って余裕など皆無だ、さっきまでの相手を挑発する態度をとることもできず、ただただ必死に避け続ける

綾乃たちのほうから見物人の悲鳴とどよめきがあがった。

「馬鹿なヤツラだ金を受け取って、黙って去ればこんな事にはならなかっただろうに！」

「・・・ッ！」

（ヤバッ！やられる！？）

連続した回避に体勢がついてこれず、動きが鈍ったところに剣が振り下ろされ、とっさに亮平は右腕を防御の形にさしだす

勝利を確信した兵士は、次の瞬間目の前に迫る地面が何なのかかわからずに顔面を打ちつけ、意識を暗転させた。

亮平が冷や汗を流しながら防御の構えを解くと、近くにいた綾乃が

口を開いた

「やはり一度鍛えなおした方がいいんじゃないか？亮平」

「はははは…、お手柔らかにお願いシマス」

幼少期の道場とは別の綾乃の特訓を思い出して、ぎこちなく笑う亮平

ボコボコにされたこと

「き、貴様ら！こんなことをしてただで済むと思ってるのか！？」

あっという間に二人の兵士を無力化され狼狽した兵士Cはフィーリアを人質とするかのように捕まえたまま、悲鳴のような怒鳴り声を上げていた

「怒るなよ、多分誰も死んじやないぜ？」

側面から綾乃に投げられた兵士Aはヤバイ角度で落ちた気がするが、綾乃を見ると当然だと言う顔で頷かれた

「なっ！？そ、そうではない！占領軍に——」

「その手を離せゲスがああああああああ！『魔力よ！敵を撃て————！』」

とんでもない怒りの声と共に人垣の中から放たれた光弾がフィーリアを拘束していた兵士の顔面で炸裂した

「馬鹿野郎！ひ、フィーリア様を巻き込む気か！」

「っ！フィーリア様！大丈夫ですか！？」

怒声&慌てた声と共に姿を現した複数の傭兵風の男達がフィーリアの安否を確かめ、地面に倒れた兵士を殺していく

そのとき視界入ったのか、慌てていた男の目が亮平と綾乃を捕らえる

「!?! 貴様らッ!」

亮平は怒りの表情を浮かべこちらを睨む男に見覚えがあることに気付く

(げッ! 召喚の間で綾乃を睨んでたヤツじゃねえか!?)

怒りの表情のまま片手を上げ亮平達の方へ向ける男に気が付いたフイーリアが叫ぶ

「やめてロコト! その人達は私を助けてくれたの!」

フイーリアの必死な声に一瞬戸惑った表情を浮かべた彼(ロコト?)はすぐに表情を改め亮平たちの方を向く

「オマエ達も来い!」

「は?! 何で俺らが――」

その直後人だかりの後ろから「この騒ぎは何だ!」という怒鳴り声が聞こえた

「! 不味い亮平、現状で残っても彼らの仲間と見なされる可能性が高い」

「つくそー! 予定がコロコロ変わりやがる! 仕方ねえ、こいつらについて行くぞ綾乃」

こうなってはシェルトリー軍のうろつく町を自力で抜け出すよりは、彼らの手を借りる方が安全だと判断した亮平は仕方なく彼らの後を

追って駆け出した。

「ってまた走るのかよーー」

第十一話 足りぬ力（後書き）

♪ 走るゝ走るゝおれーたゝち

いつそのことタイトルRUNNERにでもしましょうか
いや、やりませんけどね？

今回はちょっと短いですがここで切ります
おかしいですね、ステラに着いたらその日ぐらいはゆっくりする筈
だったんですが…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9466x/>

異世界冒険鬼(仮題)

2011年11月24日11時05分発行